原告団

和解後初めて
さらに団結して頑張る
CO患者家族の会が総会

九月六日、雨が降り続くあいにくの天気でしたが、第二十一回目のCO患者家族の会の総会が「はら会館」で開かれました。

当日は八十六人が参加し、組合から田口書記長と芳川部長、そして原告団から小川団長が出席され、田口書記長から和解をめぐる考え方を含めたあいさつを受け、小川団長は、和解までの経過と今後の原告団活動にふれながらあいさつされました。

家族の会の久保会長があいさつのあと、一年間の経過報告と会計報告、監査報告があり、全員一致で確認されました。

十四年という長い裁判闘争を、組合をはじめ全国の仲間に支えられてたたかってきましたが、内容的には多くの不満もありましたが、ようやく和解で決着をつけることになり、和解後ようやく総会を開くことができました。

ともかく久し振りに再会して、お互の無事を喜び合い、CO闘争の話になると皆んな生き生きとして語り尽くせないようです。このような集りを年二回ぐらい開いてほしいという声もありました。

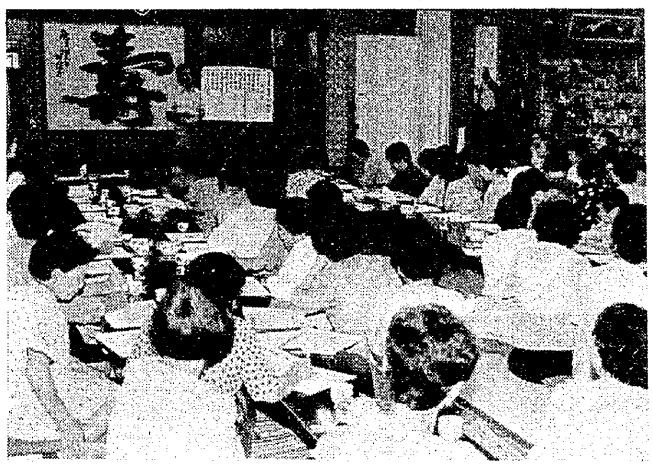
CO問題については、あいさつや報告、説明で十分納得することができ今後も頑張らなければとお互に誓い合いました。新しい役員選出（別項）では久保会長以下が選ばれましたが、役員も病気を持っていたりそれぞれの事情があったりで十分ではありませんが、会員の皆さんの協力を得て頑張っていくことを決意しております。

第一部を終えて、小川原告団長の乾杯の音頭で会食に移り、役員の堀田さんに総会を祝って「寿」を舞ってもらい、全員うっとりでした。

しばらくは和やかに話に花が咲き、やがてカラオケにのって田中さんの都都逸が出ると、皆さんから次つぎに新らしい歌、古い歌が出され、のどが良いのに驚くばかりです。歌に合わせて踊りも飛び出します。余興の最後は全員で「炭鉱節」の総おどりで幕を閉じ、また会う日までの、お別れのあいさつです。

私たちの運動は、CO患者がいるかぎり続けなければなりません。役員を中心にまた頑張りましょう。皆さん健康に気をつけて、来年の総会にも一人でも多くの参加ができるよう念じています。

（この項、斉藤清子）



総会であいさつし、今後の原告団活動について報告する小川原告団団長。この日各地から集った家族は、長い苦労を語り、さらに団結していくことを誓った。（会場の一部）

新らしい役員

会長 久保時枝（11・9）
役員 斉藤清子（11・9）
役員 室野井スエノ（11・9）
役員 堀田京子（11・9）
役員 芝尾雅子（11・9）
役員 目崎幸子（9・28）
役員 藤井サユミ（9・28）

お便りから

朝夕は過しよくなってまいりました。組合長はじめ皆さまにはお変わりなくお過しでしょうか。私たちも何とか無事に過しております。

在織中はもとより、退職後もいろいろお世話になりっぱなしで、お礼状も差し上げずお許し下さい。

このたびは、本当にご苦労さまでございました。長期にわたる裁判闘争でさぞかしお疲れになったことと存じます。何のお手伝いもできないで、甘い汁だけ頂くようで何とも心苦しいことです。早々にこの気持をお伝えしなければと思いながら今日に至ってしまって済みません。本当にありがとうございます。感謝の気持で一杯です。

——中略——いろいろと書きたいことばかりで、何をどう書いたらよいのやら。ただ申し訳ない気持をお察し下さい。つたない字や文で、お詫びと皆さまへのねぎらいのことばにかえさせていただきます。

皆さまもこれから、いろいろと大変なことと思いますが、何とぞお体をご自愛下さいまして頑張って下さい。——後略——

× ×

お便りは、半田市横川町二丁目三五の二にお住いの古賀隆和・カツ子さんからでした。

＜四面七つのまちがい答え＞
クリ、右の木の葉、カラス、柿の葉、森、籠の中の栗、実の窓

三池炭鉱社宅の変遷
社宅の集合住宅化
第十四回
武松輝男

昭和四十年代に入る。

この年は、三池炭鉱ではじめて鉱員用の、現代風な社内呼称を使えば一般職社員用の集合住宅、つまりアパートが建てられた年である。小川開一般職アパート。

三池炭鉱の社宅等級分類の一般的評価に照らしてみると、四級にあたる。しかも、近代的なスマートさがある。都会的で、文化的水準がないようで、しかも最も魅力的なのは、西欧的である。

実際に住んでみると、このような外側からの感慨は無いのだが。

ちょうど、夜汽車の、あの白黄色の窓の動きをみていると、空想幻想が重なり合って、音楽で言えば、作曲家の自由な幻想を盛り込んだ幻想曲を連想させるようなものだが、乗ってみると二段や三段の狭い吊り床に疲れることとよく似ているように思える。

人間というのは、以外と高さに憧れるのかも知れない。観光地の山手の旅館やホテルが、眼下に広がる夜の町の、煌めく電気燈の光を売り物にしているように、そのことは規模は小さいが炭鉱の集合住宅も同じことである。三階や四階から見る町並みの黄色い電球や、白光色、色付き燈の点滅は、何とも言えない。

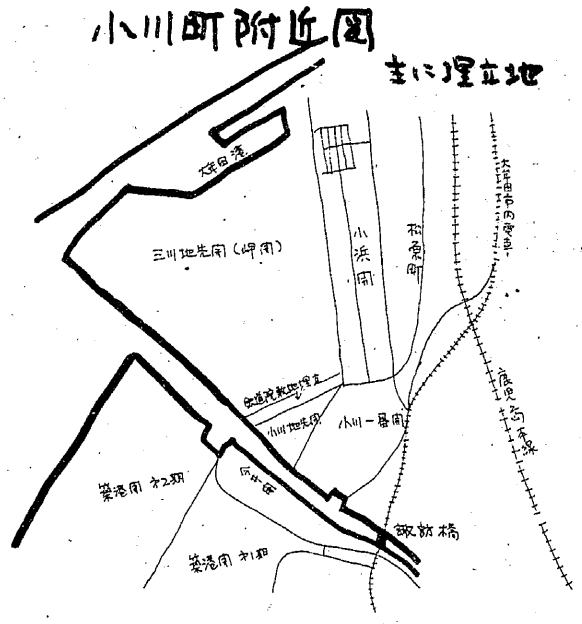
こういう幻想的なことばかり書いていても仕様のないことだが、集合住宅、この言い方の響きはあまりよくない。アパート、マンション、コーポ、これがいい。正式な呼び方だけでは生活に潤いがない。だが、どんなに新しがり屋の呼び方をしても、そこに落し穴があるもの。

室の中に電灯をつければ、薄いカーテンでは透してみえる。これこそファンタジーだが、風呂場はもとより、便所にまで厚手のカーテンをつけたという話も伝わっている。階上の床の音が階下に伝わる。子供たちの騒ぐ音だけなら話題にもなるまいが、あとは言わぬが花。

ここまで言えばわかってもらえよう。日本的集合住宅。

個の確立があるようで無い。かつての納屋での生活のように、隣人を気にしないで済むようで、それでいて気にしないでは生活できない。

『爆発』を連発して人気を得ている岡本太郎氏は「指先を濡らして刺せば隣を覗かれる障子。湯呑茶碗の湯を流せば音もなく開く襖では、隣を気にしない生活はない。そこに個の確立はない」と、ある本に書いていた。たしかにその通りだと思う。が、三池炭鉱で建てられている洋式住居、アパートは日本的生活様式を取り入れられていて、和洋折衷形。岡本太郎氏が指摘するように個の確立があるようで無い。



だが、個の確立の雰囲気は持っている。棟割り長屋のように玄関前を行き交う跫音も聞こえない。ノックドアを閉め、内側の鉤を掛けておけば、外側とは没交渉で済む。

現在危惧されている労働組合の石傾再編も、いま記しているコンクリート製集合住宅化と無関係ではないのではないか。三池闘争以降、労働組合員（従業員）には歓迎された集合住宅化と、労働組合の弱体化と、炭鉱社宅の変遷史を調べている学者はいるが、集合住宅と石傾化とを調べている学者はいないようである。全く無関係とは言えないのではないか、と思っている。

新しい労務政策。棟割り長屋のときと違って、会社にとって各個撃破がしやすい利点を造っていないか。

炭都錯乱
すぎもと・かずお

「なに、たいしたことではないよ」
「いままでにもあったことだ」
△△さん、○○ちゃん
顔ぶれ、組み合わせは違っても
豪勢な贈り物にうつつを抜かし
名うての企業や闇の男と
癒着
大金が動くところ
やったり、とったり
それが常識であり
「氷山の一角」

海千山千の輩たち
露見さえしなければと
〝高を括って〟いたが
首長が〝がん首〟そろえて
捕まった
（ああ、符のわるさ）

「三に井桁」が進出して百年
〝石炭つぶし〟と構造不況で
落ち込むばかりの〝炭都〟に
衝撃が走る
「びっくりしたやろ」
「びっくりゃせんが、腹んたつ」
びっくりしたのは当事者だった

「綱紀粛正のために…」
「市民の奉仕者であることを自覚…」
庁舎の主が替わって
さて、自浄作用はどうなった

それにしても
舞台となったのが
文化会館
文化センター

〝文化〟が泣いている

——文芸誌『塔』第八十九号特集号から——